

# 太宰府の文化財

427

## 動物の描かれた甕棺

### ―国分松本遺跡第7次調査・弥生時代―

国分松本遺跡第7次調査で出土した動物が描かれた甕棺を紹介したいと思います。



280号甕棺



280号甕棺出土状況（北から）



280号甕棺 線刻画



線刻画 トレース図



国分松本遺跡第7次調査位置図

国分松本遺跡は、国分共同利用施設が建つあたりから県道112号線の国分寺前交差点周辺に広がる遺跡です。特に国内最古級の戸籍木簡などが出土し、古代の遺跡として注目

されてきました。しかし、これまでの調査では弥生時代前期から中期の甕棺墓もまとまって確認され、太宰府市域の弥生時代の墓制を考えるうえで貴重な資料となっています。甕棺墓は、甕や壺を棺にした弥生時代の九州に特徴的な墓です。国分松本遺跡第7次調査では54基の甕棺墓が確認されました。動物が描かれているのは、280号甕棺墓の甕棺で、全体が赤く塗られた高さ約97cm、口径約68cm、最大径約74cmの大型のもので、胴部に高さ4cm、幅7cm程度の大きさで、線刻によって「鹿」と

思われるような四本足の動物が1匹描かれています。土器などに描かれる絵には、建物や人、動物などがあり、当時の生活や狩猟の様子を示す他に、動物の絵などは当時の自然環境を知る手掛かりにもなります。この甕棺に描かれた「鹿」と思われる四本足の動物も当時の太宰府の自然環境を示す貴重な資料です。山や川、動物など当時の太宰府の風景に思いを馳せていただけたらと思います。

文化財課 沖田正大